

チャレンジ！！オープンガバナンス 2018 市民／学生応募用紙

地域課題タイトル (注1)	No.	タイトル	自治体名
		公開された各種財政データを活用して、市民が自分事として行財政状況を把握できる環境整備	多摩市
アイデア名(注2) (公開)	公開された各種財政データの XView による行財政状況の把握とこの活用による市民とともに作る財政白書		

(注1) 地域課題タイトルは、COG2018 サイトの中に記載してある応募自治体の地域課題名を記入してください。

(注2) アイデア名は各チームで独自にアイデアにふさわしい名前を付けてください。

1. 応募者情報

チーム名(公開)	市民のミカタ & CodeForTama		
チーム属性(公開)	<input checked="" type="radio"/> 1. 市民によるチーム <input type="radio"/> 2. 学生によるチーム <input type="radio"/> 3. 市民、学生の混成によるチーム		
メンバー数(公開)	6 名		
代表者情報	氏名(公開)	花谷修一	
メンバー情報		鴨川威、大串幸彦、鈴木貴雄、佐藤真史、小出聡	

(注意書き) ※ 必ず応募前にご一読ください。

<応募の際のファイル名と送付先>

1. 応募の際は、ファイル名を COG2018_応募用紙_具体的チーム名_該当自治体名にして、以下まで送付してください。東京大学公共政策大学院の COG2018 サイトにある応募受付欄からもアクセスできます。 admin_padit_cog2018@pp.u-tokyo.ac.jp

<応募内容の公開>

2. アイデア名、チーム名、チーム属性、チームメンバー数、代表者と公開に同意したメンバー氏名、「アイデアの説明」は公開されます。
3. 公開条件について：

「アイデアの説明」でご記入いただく内容は、クリエイティブ・コモンズの CC BY (表示) 4.0 国際ライセンスで、公開します。ただし、申請者からの要請がある場合には、CC BY-NC (表示-非営利) 4.0 国際ライセンスで公開しますので、申請の際にその旨をお知らせください。いずれの場合もクレジットの付与対象は応募したチームの名称とします。

(具体的なライセンスの条件につきましては、<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/legalcode.ja>、および、<https://creativecommons.org/licenses/by-nc/4.0/legalcode.ja> をご参照ください。また、クリエイティブ・コモンズの解説もあります。<https://creativecommons.jp/licenses/>)

4. 上記の公開は、内容を確認した上で行います。(例えば公序良俗に違反するもの、剽窃があるものなどは公表いたしません)
5. この応募内容のうち、「自治体との連携」は、非公開です。なお、内容に優れ今後の参考になりうると判断したものは、公開審査後アドバイスの段階で相談の上公開することがあります。

<知的所有権等の取扱い>

6. 「アイデアの説明」中に、応募したチームで作成・撮影したものではない文章、写真、図画等を使用する場合、その知的所有権を侵害していないことを確認してください。具体的には、法令に従った引用をするか、知的所有権者の許諾を取得し、その旨を注として記載してください。「自治体との連携」中も同様をお願いします。
7. 「アイデアの説明」中に、人が写りこんでいる写真を使用している場合、使用している写真に写りこんでいる人の肖像権またはプライバシーを侵害していないことを確認してください。

<チームメンバー名簿>

チームメンバーに関する情報を最終ページに記載して提出してください。(2. の扱いによる代表者氏名を除き、他のメンバーに関する情報は本人の同意があるものを除き COG 事務局からは非公開です。詳細は最終ページをご覧ください。)

2. アイデアの説明（公開）

（1）アイデアの内容、（2）アイデアの理由、（3）実現までの流れ、の三項目に分けて記入してください。

必要に応じて図表を入れていただいて結構です。

（1）アイデアの内容（公開）

アイデアは、課題解決のために、何をやる社会的なサービス（活動）なのか、をわかりやすく示してください。これが将来実現した場合、魅力的で新規性があり、実践したり、活用したくなる、そしてその結果として、課題が解決される、そんなワクワク感のあるアイデアを期待します。2ページ以内でご記入ください。

<応募チームとして解決したい課題>

多摩市も「決算報告書」や「固定資産台帳」をオープンデータとして公開したが利活用されているとは言い難い。このオープンデータを積極的に活用し多くの市民に市政の状況を把握していただき市政への関心と理解を深めていただきたい。

<解決アイデアの内容>

自治体がオープンデータを活用するためのポイントを以下にあげたい。

1. 市民・住民にとって身近なデータをありのままに、個人情報に抵触しない範囲の生データとして公開する。

この点において多摩市が「決算事業報告」や「固定資産台帳」をオープンデータとしたことは評価できる。

*決算事業報告書

500以上ある多摩市の事業のその一つ一つについての事業の目的、経緯、その年の執行状況そして決算額を記した報告書

*固定資産台帳

多摩市が保有する全資産の一点一点毎の取得年、取得金額、耐用年数、現在簿価

2. 市民・住民にとってわかりやすく提示する。
有用なデータを単に EXCEL データとして掲示しているだけでは死蔵しているに過ぎない。現在の多摩市のオープンデータの状況はこの状態にある。

3. 市民・住民に咀嚼してもらうためのツールと環境を提供する。

事業の一つ一つ 資産の一点一点を特定できて容易にアクセスできる。

全体を把握するための集計は視覚的に表現されている。

また以下のようなデータを同時に準備し、これらのデータと掛け合わせて市民・住民が自分事として自分の手で容易に分析できる環境を整える。

- ・人口データ等の基礎データ（国勢調査や住民基本台帳）
- ・他市との比較データ（市町村別決算状況調等 政府統計や都の公開データ）
- ・市が独自に実施するアンケート調査（空き家調査等）

4. 気付きの機会を提供する。

市民の疑問や市民が独自に分析した結果を持ち寄り市の担当職員や市民同士で討議できる場を常設する。そしてこの議論を一般市民にも広く公開する。すなわちソーシャルネットワークによる市政に関するフォーラムを形成し、ここではデータに基づく真摯な議論がネット上で展開される。

5. 目的を設定する。

議論を展開する上で、そのテーマや目的を設定することは重要である。市民の発意によって設定することも考えられるが 自治体と市民が一緒になって目的を設定し自治体職員と市民の協働作業を通じて目的を遂行するプロジェクトを起こす。

この度、私共市民団体（市民のミカタ&CodeForTama）が多摩市の「市民とともに財政白書を作る」プロジェクトの企画に参画させていただいて検討を開始したことはその第一歩である。

6. リアルな場での発表（プレゼンテーション）の機会を設ける。

この目的遂行のためにネット上での十分な討議を踏まえても尚、顔を合わせての作業の場（ワークショップ）やまとめとしての発表の場を設定し多くの市民を巻き込んで合意に至ることが重要である。

以上のようなプロセスを支援するシステムとして、ここでは XView を提案する。

<https://xviews.jp/>

「市民とともに作る財政白書」をキーワードに「財政白書プロジェクト」を起こすに当たり上記 XView の枠組みを組み込んだ「市民フォーラム@多摩市 ByGov」サイト

<https://xviews.jp/sample/>

を開設して上記のプロセスに基づき本プロジェクトを実施することを提案する。

(2) アイデアの理由（公開）

このアイデアを提案する理由について、それをサポートするデータを根拠として示しつつ2ページ以内で説明してください。ここではアイデアの必要性、効果を確認します。データとは、統計類の数値データやアンケート・インタビューなどの資料や関連の計画、既存の施策などの定性データのことを総称します。データは出所を明らかにしてください。

<解決アイデアの理由>

市民フォーラム@多摩市 ByGov <https://xviews.jp/sample/>
は、この「財政白書プロジェクト」のためのポータルサイトである。

本来、このポータルサイトは主催者のドメイン上に置くべきであるが、ここでは企画の検討サンプルとして掲げる。XViewはこの時の機能部品として下記の枠組みを提供するだけである。

- 1) アナライザブルレポート
- 2) ワークショップ

アナライザブルレポートは主催者が準備するレポートである。ポータルサイト下部にいくつかのレポートのエントリがタイル表示されている。一般にはここからアクセスする。

この各レポートは主催者がそのレポートのシナリオに沿って、オープンデータをもとにそれを分析したグラフ・図表からなるものである。しかしソースとしてのオープンデータは生データであることからここで示されるグラフ・図表は、統計処理して集約したものではあるが、それは生データとしてのオープンデータの一面しか表していないことに注意が必要である。アナライザブルレポートとはその表示されたグラフから更に深く分析できるものであるという意味が込められている。もちろん、レポートとしてその各々に対する説明は必要ではあるが、主催者自身の主張や見解は避けるべきである。むしろ閲覧者（以降、一般参加者）がこれを見て感じるどころや意見をそのグラフの下部にある投稿ボタンから投稿してもらおう。

一方、ワークショップは主催者が主催するイベントの開催やその討議・発表を支援するものである。

一般参加者の投稿は、指定されたそのイベントの一つに投稿される。その投稿はポータルサイトのワークショップ（イベントの一覧）からイベントを指定して開く画面（以降プレゼンテーション画面と呼ぶ）のサイドバー内でその一覧を見ることができ、その一つを指定して投稿の内容を見ることができる。

投稿は前に述べたようにアナライザブルレポートからもできるが、この「投稿する」ボタンからもできる。その投稿フォームからわかるように投稿は主に本文、キーワードおよび引用するXViewのグラフ・図表からなる。ただし引用は必ずしも行なわなければならないものでもない。

また、引用はXViewアナライザブルレポートの他に自身の作成した資料、インターネット上の情報、書籍の情報等を引用することもできる。ここで自身の資料はオープンクラウド上のフォルダにおき、そのファイルのurlを指定する。また書籍は蔵書検索システムである「カーリル」を経由してアマゾンの書評にリンクしてこれを見ることができる。

投稿されたコンテンツはタイトルとキーワード並びに引用先にリンクする画像がパワーポイント風のプレゼンテーション画面に表示される。ワークショップではこれをそのまま使用してプレゼンテーションすることができる。本文はタイトルをクリックしたところにディスカッションフォームとともに表示され、この投稿に対する意見を募りディスカッションすることができる。

尚、それぞれの画面上のFBのソーシャルプラグインで、この議論を広く拡散させることもできる。

主催者はこのようにして一般参加者から募った投稿にテーマに応じたセッション付け（分類分け）を行い表示の順を指定することで投稿の「編集」を行う。又指定のイベント以外への投稿も「全投稿リスト」から投稿をピックアップして、ここに加えることができる。ただし、これらの編集機能はイベントの主催者と編集権限を持つものだけに限られる。

以上が一般参加者による投稿の方法と主催者がこれを編集するための基本的な手順である。

しかしながら他の閲覧者がその投稿を見たとき必ずしもその意見に同意できない。あるいは提示されたグラフの出展や集計の方法を検証したい。また別の視点からこのデータを分析してみたいと思う時がある。このような時こそが議論を発展させ深い考察につながる上で最も重要である。

また前にも述べたように主催者が提供するレポートはそのオープンデータの一面しか表していない。当然ながらその集計値から要素を特定したり異なる表現をしてみたいと思うことがあるだろう。

XView はこのような場合の多くの分析機能とコンテンツを提供し、誰しものがこれを容易に扱うことができる機能を提供する。

例えば、プレゼンテーション画面上の画像から **XView** のグラフに導かれる。更にそこからそのグラフのソースデータにアクセスできる。これらの機能はアナライザブルレポートのグラフからも同様である。

そしてそのグラフの軸を変えてグラフの表現や表示内容変えることができる。更にそのソースデータから **XView** で提供される多くの分析機能、視覚化機能を用いて閲覧者自身が新たな分析を行うことで新たにグラフ化する。そのグラフは自身のアナライザブルレポートである「マイレポート」に登録される。投稿時にはこれを投稿フォームの **XView** アナライザブルレポート部「マイレポート」から参照して、そのグラフとともにそのデータに関する自身の意見として新たに投稿できるのである。

～以上は9ページ 「ハンズオンで確認いただきたい機能」を参照願う。～

自分自身のデータを **XView** に登録したい。または **XViewDB** がないオープンデータを **XView** に登録したい場合も容易にこれを実行できるが、その説明は **XView** 本体の説明に譲りここでは割愛する。

以上のように **XView** の機能 (**XView** トップページ及びポータルサイト前文参照)

- CrossAnalysis** (分析・視覚化)
- CrossGather** (データ・分析結果の持寄り)
- CrossTalk** (意見交換)
- CrossOver** (プレゼンテーション)

を活用して市民自身が生のオープンデータを自在に分析して多くの一般市民にわかるように視覚化し、一つのデータから派生するデータや分析結果を持ち寄り意見交換して最終的にはまとまったメッセージとしてプレゼンテーションする。

この一連のプロセスを組み込んだサイト「市民フォーラム@多摩市 **ByGov**」を開設して、市民を交えて財政白書を作るという目的に向かってプロジェクトを遂行することで、市民が市政の状況を把握できる環境と機会とする。そして折角の公表したオープンデータが有効に活用され市民の市政への関心と理解が深まるものとする。

(3) アイデア実現までの流れ（公開）

アイデアを実現する主体、アイデアの実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）の大まかな規模とその現実的な調達方法、アイデアの実現にいたる時間軸を含むプロセス、実現の制度的制約がある場合にはその解決策等、アイデア実現までの大まかな流れについて、2 ページ以内でご記入ください。ここでは実現可能性を確認します。

<アイデア実現までの流れ>

現在 来年度実施に向かって「市民とともに作る財政白書」をキーワードに 多摩市並びに 市民団体である「市民のミカタ」と「CodeForTama」で 「財政白書プロジェクト」を企画中である。

1. 実施する主体

- 多摩市 : 実施主体
 市民のミカタ CodeForTama
 ・「市民フォーラム@多摩市 ByGov」サイトの運用支援
 ・ワークショップ イベント開催時の運営支援

2. 実現に必要な資源（ヒト、モノ、カネ）

運営主体の作業 並びにワークショップやイベントの開催経費、広報に必要な経費以外特になし

3. 実現にいたる時間軸を含むプロセス

現在 「財政白書プロジェクト」を企画中ではあるが、メンバーの間でこのプロジェクトに対する期待やアイデアが討議されている。

例えば私共市民はこの活動を一過性に終わらせることなく毎年定期的に行い、ここに出てきたアイデアや成果を市政に反映する仕組みを議会をも巻き込んで考えて欲しいとしている。またこのプロジェクトを市民に関心を持ってもらうためには成果を出した個人・チームに賞金をはずむべきだとの意見が市民の間で出ている。

いずれにしてもその実現性や考え方を来年1月中には調整した上で市民に広く広報し4月以降、実行に移すことを市民として要望したい。

4. 大まかな流れ（市民サイドの市側に対する要望）

- 来年 1月 課題の検討 考え方の調整
 2月・3月 広報
 4月—12月 実施
 4月 説明会
 ・隔月にワークショップ
 12月 ラップアップ

<自治体から入手したデータ>

決算事業報告書データ

多摩市財政白書（過年度分 参考データとして）

中期財政見通し

固定資産台帳（多摩市施設白書）

市の人口データ 空き家調査データ等

<自分で入手したデータ >

国勢調査

市町村決算状況調べ等 政府統計

尚 今後これ以外にも都のデータや民間調査データも取り扱う予定

<市民フォーラム@多摩市 ByGov <https://xviews.jp/sample/> ハンズオンで確認いただきたい機能>

1. ポータル アナライザブルレポートのタイトルから各レポートの内容が見えること
2. 各レポートの各グラフ画像から投稿フォームに導かれること
3. 各レポートのグラフ画像から XView グラフ（グラフの拡大）に導かれること
4. ポータル ワークショップ 第一回財政白書作成会議からプレゼンテーション画面を開く
5. プレゼンテーション画面の構成
 - ーサイドバーに投稿のタイトル一覧 と 「投稿する」の投稿ボタン
 - ー最初のプレゼンテーション：タイトル「財政白書プロジェクトの趣旨」
画像から 過年度の財政白書にリンク
タイトルから 本文 及び ディスカッションのためのコメントフォーム
セッションで投稿が分類分けされていること
6. 投稿 1 「決算報告書を見て思うこと」から
グラフ画像から XView グラフ
「このソースから独自の分析をしよう！」ボタンからソースデータへ
ソースデータ「一般会計歳出決算」の「本表の機能」を参考にその画面の機能の確認
例えば 款→項→目→事業名とドリルダウンできること
7. 投稿 2 「固定資産台帳を見て思うこと」から
画像から「固定資産台帳（建物）」へ
「本表の機能」を参考にその画面の分析機能の確認
ここでは期末簿価でソートしている。他にヘッダのプルダウン 検索機能等
8. 投稿 3 「東京 26 市高齢化率分析」から
画像から「東京 26 市全指標比較」の散布図（縦軸「高齢化率」横軸「財政力指数」）
例えば横軸を他の指標に変えることで高齢化に対する各指標に関し多摩市がどの位置にあるかがわかる。
9. 投稿 4 「東京 26 市指数マップを見て思うこと」から
画像から「東京 26 市全指数比較マップ」へ
財政力指数の偏差値を地図上に表示したものである。
プルダウンから他の指数も地図表示できること
必要ならソースデータにアクセスして各指数のランキング表示ができること
10. 新たな分析の結果は新たなグラフとして視覚化できる。そのグラフはアナライザブルレポートの一つである「マイルポート」に登録できること。これを投稿フォームの XView アナライザブルレポートから参照でき、これを引用して投稿できること。

以上をご理解のため仮投稿いただいても結構です。